

総合的な思春期・若年成人（AYA）世代のがん対策のあり方に関する研究

「AYA世代のがん患者の栄養の実態とニ - ズ」

研究分担者 鈴木礼子 東京医療保健大学 准教授

研究要旨：AYA 世代がん患者が、食や栄養面でどのような問題を抱えているか横断的に調査する。また世代が異なるがん患者や AYA 世代の健常者と比べて、食・栄養・味覚などにかかわる AYA 世代がん患者特有の課題を抽出し、そのニ - ズや支援策を検討する。

並行して、社会的に孤立しがちな AYA 世代がん患者は、ガイドラインなど政策を含めて様々な分野からの支援が必要な世代であり、その認知度は低い現状がうかがえる。日本における「AYA 世代がん患者」の認知度調査を実施し、社会的認知度を高めることを通して、AYA 世代がん患者の自立・支援・QOL 向上へつなげる。

A．研究目的

平成28年度は、以下の研究 を実施した。

研究 AYA世代がん患者が、食や栄養面でどのような問題を抱えているか横断的に調査する。

研究 世代が異なるがん患者やAYA世代健常者と比べて、食・栄養・味覚などの調査を実施し、AYA世代がん患者特有の課題を抽出し、そのニ - ズや支援策を検討する。

研究 AYA世代がん患者の認知度調査を実施し、社会的認知度を高めることを通してAYA世代がん患者の自立支援・QOL向上へつなげる。

B．研究方法

研究 AYA世代がん患者（サバイバー含む）および健常者へのアンケート調査

研究 AYA世代がん患者（サバイバー含む）およびAYA世代健常者への食環境・食事摂取頻度調査および味覚調査

平成28年度は、AYA世代健常者の研究を実施した。がん患者調査は倫理委員会申請中である。東京医療保健大学学部生の男女で研究参加に同意し「味質識別調査」「食物摂取頻度調査」「食環境調査」に回答した117名。インスタント食品やファストフードの摂取頻度などの「食環境要因」と「うま味識別能」との関連について横断的調査を実施した。

食環境要因（人工甘味料使用頻度、インスタント麺摂取頻度、ファストフード使用頻度、辛味のある食品摂取、主食・主菜・副菜がそろった食生活など）と「うま味識別能」との関連などを検討し

た。統計手法は $\chi^2$ 検定、t検定を用いた（統計学的有意水準 $p < 0.05$ ）。本研究は東京医療保健大学の倫理委員会の承認を得て実施された。

研究 食育フェアや食育大会へ来訪した一般の方へのアンケート調査

（倫理面への配慮）研究 は各施設独立して倫理委員会へ申請され承認後に実施された。

C．研究結果

研究 AYA世代がん患者（サバイバー含む）が入院中に困っていることの中で「食事があわない」を選んだ方が全体で36.7%、年齢区別では15～19歳で約7割、20～24歳で43%、25～29歳で38%、30～39歳で約22%で、若年齢層に多かった。

「健康管理のための食生活」を悩みとしている割合は治療中患者16%、サバイバー18%、健常AYA16%であった。

「味覚・嗅覚・食嗜好の変化など」を悩みとしている割合は治療中患者5%、サバイバー2%、健常AYAでは本対象者ではいなかった。

「自分で栄養管理を考える」の割合は、治療中患者では38%、サバイバーでは77%であり、統計学的有意差が認められた。

研究 食・栄養・味覚調査

味質識別調査の結果、「うま味」は塩味、甘味と比べ正答数が少なく識別しにくい味質であること、また、うま味を「苦み」と答える学生が多い傾向が観察された。

人工甘味料使用頻度、インスタント麺摂取頻度、ファストフード店利用頻度などが、月1回未満の群と比較して、月1回以上の群が、統計学的

有意にうま味識別能力が高い結果であった。

#### 研究 AYA世代の認知度調査

平成28年度東京都食育フェアにて実施。483名中、AYA世代の認知は38名（7.9%）であった。

#### D. 考察

研究 AYA世代の中でも、特に若年層15～19歳の入院中のがん患者の食事についてQOL向上のため対策が必要であることが、示唆された。

研究 AYA世代健常者のうま味識別能は、食環境依存的なものである可能性が示唆された。AYA世代健常者では味覚に問題を抱えていると答えた方はいない状況であった。

うま味識別能は、インスタント食品や、人工甘味料などを多く摂取する食環境にいる状況であるほど、SMG識別能が高い結果であった。

研究 一般対象とはいえ、食育フェアに参加する方々は医療情報や健康志向が高い集団と考えられる対象者であるにもかかわらず、「AYA世代」がん患者についての認知度は10%にも満たない結果であった。さらなる認知普及活動が継続的に必要と考えられる。

#### E. 結論

研究 年代を超えて「味覚・嗅覚・食嗜好」「健康管理のための食生活」「体力維持と運動」などの情報提供が必要とされていた。

・AYA世代がん患者（サバイバー含む）が入院中に困っていることの中で「食事があわない」を選んだ方は15～19歳で約7割で若年齢層に多かった。

・サバイバーにとって必要な情報として「健康管理のための食生活」が上位10位にあげられていた。

これらの状況を踏まえ、AYA世代のがん患者へ食・栄養情報の提供支援を考える必要がある。

研究 平成28年度の調査は、AYA世代健常者の結果報告となった。AYA世代健常者においては、予想に反して、最高濃度うま味溶液において、人工甘味料、インスタント麺、ファストフード店などの摂取頻度が高い群で、MSG識別能（うま味識別正答数）が高い結果となった。がん患者との比較検討については、倫理委員会申請中で、来年度を含め、今後の研究課題である。

研究 AYA世代という言葉自体の一般的な

認知度は相当低い現状が明らかとなった。さらなる普及活動が継続的に必要である。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

・**鈴木礼子**、山岸萌、矢藤真代、牧野あかり、峰村貴央、小西敏郎  
食育推進全国大会（墨田区）における乳がん予防情報の提供活動と認知度調査。

第63回日本栄養改善学会学術総会

2P014 学会抄録栄養学雑誌：.supple.74(5) 269・2016（示説発表 2016.9.8）

・**鈴木礼子**、峰村貴央。

乳がん予防情報の認知度調査（神奈川県、広島県、長野県、墨田区食育推進全国大会）

第75回日本公衆衛生学会総会 抄録

示説発表 2016.10.26～28

・峰村貴央、矢後暁美、小西敏郎、牧野あかり、矢藤真代、山岸萌、**鈴木礼子**

大学生を対象とした味覚調査～無味の試液についての感度調査

第63回日本栄養改善学会学術総会：3P039（学会抄録：栄養学雑誌）supple.74(5)321・2016（示説発表 2016.9.9）

・峰村貴央、吉村香子、**鈴木礼子**

飲酒とがん発症リスクとの関連の可能性について～認知度調査～がん予防学術大会2016名古屋・名古屋大学（示説発表 2016.7.2）

・吉村香子、**鈴木礼子**、山岸萌、牧野あかり、矢藤真代、森友季子、峰村貴央

食物・栄養関連要因（セレンを含む食物摂取）とがん発症予防の可能性について～大学生によるがん予防情報提供活動と認知度調査～がん予防学術大会2016名古屋・名古屋大学（示説発表 2016.7.2）

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし